

5 Rd.
JUL 2012

RACING PRESS

apan

**2012 AUTOBACS SUPER GT ROUND 5
Pokka SUZUKA1000Km RACE**



SUPER

G

2012 Round 5 SUZUKA

Editor
吉川 嗣恵

Photo
鉄谷 康博
加藤 公丸
中村 佳史
Special Text
近江 勲
島村 元子
小澤 克仁

41st INTERNATIONAL Pokka 1000Km RACE 8/18-19



S Road MOLA GT-Rが意地の勝利!

1号車、今シーズン初優勝

SUPER GT 第5戦の舞台は、三重・鈴鹿サーキット。4年ぶりに伝統の一戦が帰ってきた。その名も「第41回国際ポカ1000km」。歴史ある真夏の戦いとして長らく知られているが、1000kmという長丁場でのレース実施はなんと4年ぶり。世界的な経済状況の余波を受けて700kmに、そしてさらに昨年には東日本大震災の影響で500kmまで短縮。ほぼスプリントレースとしてイベントが行われてきた。だが、今年は1000kmと通常のおよそ4倍へ! 厳しい夏の暑さを伴った一戦は、速さはもちろん、強いレースをすることが勝利への最短距離になると考えられた。そんな中、まず速さをアピールしたのが、ディフェンディングチャンピオンのNo.1 S Road REITO MOLA GT-R (柳田真孝/R.クインタレッリ組)。予選で申し分のないタイムアタックを見せ、ポールポジションを獲得した。強い日差しの中スタートした決勝。ポールから首位をキープするNo.1 GT-R。だが、序盤でGT300との接触を犯して緊急ピットイン。ポジションダウンを強いられた。ところが、レース開始から2時間を過ぎた時点でセーフティカーが入るアクシデントが発生。これで失ったマージンを取り戻し、さらにはトップをも奪回。再びトップを走り始めた。後半に入ると、大小多くのレースアクシデントがまた発生。サバイバルレースともいえる過酷な展開となり、2度目のセーフティカーが入る事態になった。しかし、その中でも1号車のトップが揺らぐことはなく、そのままチェッカーフラッグをトップで受けて今シーズン初優勝を遂げるようになった。



GT500



2nd



3rd

GT500

GT500 決勝結果

優勝	No.1	S Road REIT MOLA GT-R	柳田真孝 / ロニー・クインタレッリ
2位	No.35	KeePer Kraft SC430	国本雄貴 / アンドレア・カルダッリ
3位	No.24	D'station ADVAN GT-R	安田裕信 / ビヨン・ビルドハイム
4位	No.12	カルソニック IMPUL GT-R	松田次生 / ジョアオ・パオロ・デ・オリベイラ
5位	No.23	MOTUL AUTECH GT-R	本山 哲 / ミハエル・ウルム
6位	No.19	WedsSport ADVAN SC430	荒 聖治 / アンドレ・クート

アストンマーチンが大逆転勝利

66号車 triple a Vantage GT3が怒濤の追い上げで優勝

予選で申し分のないトップタイムをマークしたのはNo.66 triple a Vantage GT3。ところが車両規定違反が予選後に発覚。タイム抹消という最悪の事態となった。しかし、決勝では最後尾から目の覚めるような最速スピードで次々とライバル達を蹴散らしていく。あっという間にトップを奪取したNo.66 Vantageは、それ以降、盤石の走りを見せて他を寄せ付けず、パワフルな戦いで見事今季初優勝を果たした。



GT300 決勝結果

優勝	No.66	triple a vantage GT3	吉本大樹 / 星野一樹 / 吉田広樹
2位	No.3	S Road NDDP GT-R	関口雄飛 / 千代勝正 / 佐々木大樹
3位	No.88	マネバランボルギーニ GT3	織戸 学 / 青木孝行 / 澤 圭大
4位	No.43	ARTA Garaiya	高木真一 / 松浦孝亮
5位	No.11	GAINER DIXCEL R8 LMS	田中哲也 / 平中克幸 / 余部 敦
6位	No.33	HANKOOK PORSCHE	影山正美 / 藤井誠暢

GT300

THE TEAM

CLOSE-UP

Team TEAM IMPUL

Text by M.Shimamura

Photo: Y.Tetsutani / K.Kato / Y.Nakamura



J.P.オリベイラ選手



松田次生選手



現役さながらの燃える闘魂は健在 今もなお、勝負師の顔を持つ名監督

日本におけるツーリングカーレースとして、現在はSUPER GTが最高峰として君臨しているが、かつては、全日本ツーリングカー選手権、全日本GT選手権などという名称で開催されていたこともある。だが、今も昔も変わらないもののひとつとして知られるのが、TEAM IMPULの存在、そしてそれを率いる星野一義監督だといえる。



もともとモトクロス選手として活躍、のちに日産自動車のワークスドライバーのテストを受け、4輪の世界へと転向した経歴を持つ。ツーリングカーからレーシングドライバーとしてのキャリアをスタート、以後、フォーミュラレースにも参戦し、日本における4輪モータースポーツ史上、様々なカテゴリーで活躍を見せてきた、まさに生き字引的存在だ。その証拠として有名なのが、「日本一速い男」としての呼び名だろう。常に攻めの走りを見せるその姿は、同じ土俵で戦った若手外国人ドライバーからも高い評価を受けている。

自らチームを立ち上げたのは、1983年。その頃は自身でもステアリングを握り、レースに参戦。戦歴が伴わず、厳しいシーズンを通すこともあったが、常に勝利を目指して燃える姿がレースファンから厚い支持を受けており、名実ともにトップドライバーであることは間違いない。1997年にはフォーミュラレースから、そして2002年には現役ドライバーとしての引退を表明したが、現役時代からのスポンサーを務めるカルソニックは現在もチームパートナーとして提携中。そのカラーリングは「カルソニックブルー」とも言われている。

現在は、SUPER GTだけでなく、全日本選手権フォーミュラ・ニッポンにチーム参戦。今でもレース中は現役さながらの熱い闘志で采配を振るうため、よくTV中継中にもクローズアップさるほどの熱血漢ぶりは健在だ。

TOPICS



KEIHIN HSVは93周目に右リヤがバースト、157周目に2度目のバーストで大クラッシュ。鈴鹿の最大の高速コーナ130R出口での事故。プレスルームに映し出された映像ではほぼ壊滅。幸いドライバーの塚越広大は無事だった。



EPSON DUNLOP HSVは序盤、中山友貴が33周目に第2コーナでクラッシュ。



GSR初音ミクBMWはガス欠で片岡龍也がマシンを止める。悔しさを隠せない谷口信輝。



GT-Rのエース車両23号車はGT-R勢の4番手。フィニッシュ結果は5位。

